会員のひろば

社会学としての囲碁麻雀

十勝医師会
新得診療所
杉目　正尚
（日本棋院帯広支部長6段）

学生時代、私は麻雀に凝っていた。同じくギャンブラーだった父は、徹夜続きの私の体を心配して囲碁を勧め、手ほどきをしてくれた。父の思惑は見事に当たり、しばらくして囲碁にはまった私は麻雀の回数を極端に減らした。

今日、ＴＶゲームが全盛で子供たちの社会的発達に与える影響について賛否両論がなされている。今回、あえて囲碁麻雀の社会的効能を少々真面目にまとめてみた。

麻雀は複雑で洗練されたゲームとして大衆を魅了して離さない。実力だけで戦う囲碁将棋や運だけに賭けるルーレットなどとの中間にあって、麻雀は両者の魅力を兼ね備えている。

麻雀で勝つためには機敏で直感的でかつ大胆な計算力で、ぐるぐる回っている運命の輪から一瞬のうちに、幸運を掴み取らなければならない。チャンスが巡ってきた時逃さず捕らえられるか、実力だけで出世できるとは限らない組織社会の厳しさの訓練でもある。

また、麻雀では囲碁のように考える時間を与えてくれない。即断即決を要求される。社に帰って上司に伺いを立てなければ何も決められないという営業マンとは交渉どころか話す気にもなれない。3人を相手に常に嘘と実とが交差する中で即断即決を繰り返す、大変疲れるゲームである。しかし麻雀の場で失敗を繰り返せば、混沌とした世間で誰が誠実で誰が嘘つきなのか見分ける力が着実に養われていくだろう。オレオレ詐欺など問題外だ。

囲碁は中国で発祥し東洋文化の中だけで完成され、近代になってから西洋に渡った。チェスと将棋はインドで同じ起源で発祥しすぐ西洋と東洋に伝わり別々に発展し現在の姿となった。チェス（将棋）では敵をせん滅し王を捕らえるのが目的だ。囲碁では双方が碁盤のシェアーを争いより多く地を得た方が勝つ。双方とも何がしかの地を得て、石は盤上で平和に共存する。51対49即ちわずか半目の差で勝敗が決まるというのが最高の結果とみなされる。地は土地、石は人民を表す。江戸時代の侍は石高（こくだか＝米＝領地）で位を示された。囲碁は広い中国大陸を住み分けた三国志的戦略が反映されている。チェスは戦争のゲーム、囲碁は平和共存のゲームと言える。

戦争では勝者は敗者に止めの一撃を加える。チェックメイトだ。征服者は被征服者に無条件降伏を要求する。パナマ、アフガン、イラクとアメリカ勝利のチェックメイトが続く。しかし王様を捕らえてもそれですんなり終わらないのが現代の戦争だ。囲碁はこの戦争心理に代わる対照的な世界観を提供する。いったん、戦争ゲームから分かち合いゲームへうまく切り替えられれば、大きな可能性が開ける。地球は十分に広くてキリスト教、イスラム教、仏教、資本主義、社会主義、民族主義、共同体経済などをともに調和のうちに棲み分けられるはずだ。なぜならば私たちは皆同じゲームを、少しばかり異なった、しかしそれでもお互いに受容れられるルールで競っているだけなのだから。

最後に囲碁独特の紛争解決法である『コウ』という手段を語ろう。無限を意味する仏教語の『永劫』からきている。ルールの詳細は省くが、互いに譲らないある局所的領土紛争の解決策として代替え地を求める方法である。相手がその妥協案を気に入らなければコウの繰り返しが続く。初めは大きな『コウ材=代替え地』から交渉をはじめていき、双方が納得するまで要求しあうのだ。『コウ材』は次第に小さくなり、遂には紛争地より小さな代替え地しかなくなる。その瞬間どちらがより有利に見切りをつけるか、勝負を左右するところである。しかも、どんなに腹を立ててもチェックメイトする王様は存在しない。粘り強く交渉を続け、半目勝ちに漕ぎ着ける。囲碁の醍醐味である。

参考文献
1. 水口藤雄　囲碁の文化誌
2. 三浦康之　碁このアジア的経営パラダイム

メキシコトルーカ大学にて（2007年 筆者撮影）

ちょっと変だぞ！自然が病んでいる？

札幌市医師会
門脇　純一

猛暑で騒いでいる日本中の、とある日、ＮＨＫのテレビに‘ちょっと変だぞ、日本の自然’と題して、最近の動植物についての異変を報告したのがあった（07/8/17）。

個人的にもこの課題は、興味をそそられるものであったのでつい引き込まれてしまった。最近の異常気候は、わが国に限ったものでないと感ずることが多い。洪水かと思うと、干ばつ、山火事、竜巻、台風、ハリケーン、猛暑で熱中症と騒ぐ一方、厳寒で死亡など両極端な状況が目立つ。

動植物についても、減少、増加の変動差が大きいことが気になり、地球に何か大きな異変のあることを示唆しているのではないかなど、つい考えさせてしまう。

事実、テイム　フラナリー；地球を殺そうとしている私たち（ヴィレッジ　ブックス、2007）は、重大なメッセージを提供している。

テレビで示されたのは、主に動物の大発生に関してで、知らなかったことが多い。

クマゼミの大発生

セミの仲間では大型なほうで鳴き声も大きく、一大合唱になると電車の騒音（90デシベル）に近くなるそうである。ケヤキなどに好んで居をかまえているようである。大阪の長居公園では約10万匹、大阪市全体では100万匹を超えるという。

1985年頃から目立って増加してきたらしい。原因は、暑く乾燥を好むことによる気候の変化。人間にとって不都合なのは、騒音とインターネットの被害（209件）である。インターネットのケーブルに卵を産みつけるのが原因だそうな。

このクマゼミの集団は、本土の東側に移動中である。

食べれないウニの大発生

場所は、三陸海岸の泊浜が取材先。大発生の海は、この地方に限局してはいない。ウニの大発生であれば、漁師にとっては喜んでいると思いしや、全く逆で苦しんでいる。というのは、商売にならないウニの大発生なのである。すなわち生殖巣、いわゆる人が好んで食べる部位が貧弱で、味も普通のものより格段に劣っているからだという。

25年前にはアラメ（昆布科の海藻）が、人がもぐった時に身体が見えなくなるほど繁茂していたのが、最近は白い岩石の肌ばかりが目立っている。海水温は最近100年間で1℃ 上昇し、魚群は適温を追って北上している。

ラクダの増加と干ばつによる街への乱入

オーストラリアはラクダのいない国であったが、荷物を運搬する目的があって移入された。この動物、オーストラリアの土地と気候によく適応して増加してきた。ところが、最近の史上最大の干ばつにより、水、食物不足に陥り、水不足に強いはずのラクダにおよび、人の生活圏に乱入し、飲食し家屋の破壊まで起したという。

宮島沼とマガン

北海道のこの沼は、渡り鳥マガンの休息地として全国に有名となった。ある季節には、風物詩となり、写真家、愛鳥家には愛されている。ところが、最近マガンが激増して5万羽に達し、朝方の出発時には美しいから、凄まじいという表現に変貌してきている。

生きているものには、共生という美辞がある。マガンの餌は落穂だが、1羽1日130ｇだというから、5万羽となると莫大な餌が必要である。共倒れにならないためには、どんな選択となるのか。経済業界の選択では、単純明白な解答になるのだろう。

越冬地の雪融けは早くなってきているので、優しい解答を含め、早めの検討が必要になってくる。

エゾエンゴサクとマルハナバチ

エゾエンゴサクは広辞苑であたるとケシ科の多年草で、春に紫紅色の花をつけるとある。この花はマルハナバチが活動期に受粉することで開花するが、ある年ほとんど花をみなかったという。この原因は、ハチの活動期が例年とずれたことによると説明されている。今後は生物の分布と生活環が変化することが予測される。

イヌワシと子育ての失敗

ここの項は増加と逆の減少である。イヌワシは高山帯に住み、雛の主な餌には野兎がある。野兎を高空から探し発見し捕らえる。東北で観察したイヌワシの親子は雛が誕生した頃、野草の発育が例年より早いため、背丈が高く野兎の発見に成功せず捕らえられなかった。そのため餓死したのだろうとのこと。これまた、上述のように生活環のずれが推定される。

日本アリと外来種アリの戦い

同様のことが、魚、他の動物でもよく話題になる。海外のアリはアルゼンチン産で、1993年頃に輸入された木材に紛れ込んで移入された。移入先住宅地は岩国市である。この外来種のアリは人間だけに問題を起こしているだけでなく、日本アリとも生活圏をめぐり激しい交戦がある。

外来種のアリは足が速い。このことは食料の収集にも勝利を収めるとともに、子孫の繁栄にも長けており優勢なそうな。人間に対しては、家に入り込み時に人を刺し、殺虫剤の経費も月1万円を超えるというから馬鹿にならない。

以上、述べてきた話題は動植物の生活環の変化、分布の変化に大きく関連してのこととなり、二酸化炭素、地球温暖化を避けて通れない。地球温暖化はわれわれ人間にも大きな問題を掲げている。

この二酸化炭素、今のところ大気から隔離する方法が見つかっていない。この好ましくない地球上の諸問題は、利害が絡んでいて世界の政治界、産業界、エネルギー界の協力は複雑で簡単に得られていない。

ただ、時間の切迫している問題なので、まずは、個人にできることから始めなければならない現況といえそうである。

札幌市電

石狩医師会
御園生　潤

昭和46年、札幌は冬季オリンピックを間近に控えて大いに活気づいていた。交通網の再編成となるべく地下鉄南北線（北24条～真駒内間）の建設作業も急ピッチで進められていた。馬鉄から発展し、長い間、札幌市民の足を支えてきた札幌市電（路面電車）の大幅な路線縮小化も時間の問題となっていた。

当時、小6の私が夏休みに自由研究課題（夏休み帳は既に廃止され、生徒の自由意思でテーマが選択できた）に選んだテーマがこの市電の全車両を写真撮影することであった。当時の市電は6系統に合計150両余りのボギー車が活躍しており、大幅な路線縮小化を間近に控えたとはいえ、朝夕のラッシュ時に駅前通りで数珠繋ぎとなる連接（結）車（貫通式の2両編成電車）などが瞬時に大量の乗降客をさばく様は誠に壮観であった。

全車両を効率的に撮影するには、電車が確実に出庫する時間帯を選ばねばならない。撮影に取りかかったのが6月の札幌まつりのころで、父親がそっとプレゼントしてくれた当時流行のオートフォーカスカメラで大量の祭典興業会場行きの臨時電車を狙ってフィルムに収めた。夏休み中は朝のラッシュ時に目をつけ、四丁目十字街、旧交通局前（現西十五丁目）など多数の路線が交錯する地点に陣取り、未撮影の電車の現われるのをじっと待っていたのである。こうした結果、夏休みの終わりには立派な記録アルバムが完成し、担任の教師を唖然とさせてしまった。

幼少期の思い出の中にも市電にまつわるものが多い。戦後新造された550～580形（東京・汽車会社製）など一部のボギー車は、展望席として運転席の右側先端までモケット張りのシートが延長されており、子供たちにとっては格好の座席であった（写真）。この形の電車が来るまで、他の形の電車をやり過ごし、じっと待っていたのも懐かしい思い出である。連接車には、遠足、写生会等でずい分お世話になったが、北欧型のデザインで人気の高かったA830形連接車が、鉄道友の会のローレル賞を受賞したのも快挙であった。

路面電車の現存する街も、道内では他に函館市、道外では松山・広島・長崎市などのみとなったが、現在30両余りの営業車両を有する札幌市電は車両の更新・改造を進めつつ健在である。札幌市営地下鉄路線は現在3方向に3路線。現在の市電路線の存続を勇断した。当時の市長の力で、今日も一系統（8.5km）にカラフルな車体の電車車両たちが軽やかに走行している。

中央保健所前を発車した568号車（⑧系統・三越前行）
筆者撮影　1971年8月
この系統（山鼻～西線循環線：三越前～教育大学前～㊥前）は現存する市電路線に近い経路である。
「中央保健所前」は現在は「山鼻九条」となっている。

○

（財）札幌市交通事業振興公社が主催する「さっぽろ市電フォトコンテスト」も今年で3回目となったが、応募期間中の昨年9月18日から、今年1月31日中に96名から合計160点の力作が寄せられた。2月6日の審査により、グランプリ、優秀賞、理事賞、電車事業所長賞各1点と入選20点が決定。鉄道写真を趣味としてきた私も加齢と業務上の多忙さで遠路への写真撮影に出かけることが難しくなってきていたので、手軽に取り組める札幌市電の四季の写真を撮りため、今年度のコンテストに3点を出品した。そのうちの一点「紅葉の藻岩山を望んで」が入選となり3月1日に表彰式に出向いた。この写真は幌南小学校前の横断歩道橋上から撮影したものであるが、俯瞰的に藻岩山を目指し進行する赤色の広告塗装電車（253号）と対向する緑色の電車を手前に配し、遠景には紅葉盛りの藻岩山とちょうど通過するロープウェイを収めたものであった。紅葉の状態の確認と天候にも苦労したが、ロープウェイの速度が予想以上に速く、（夏季は午前10時からの営業）、順光となる午前中に満足できる電車の配置、ロープウェイの位置をかなえた作品がようやく完成したのが、3度足を運んだ10月28日（日）であった。奥行きの深い良い作品になったと思っていたが、入賞という結果に充足感にひたっている。入賞作品を含めた応募全作品は3月1日～4月30日まで地下街東西コンコースに展示され、入選作品は展示車両（8502号：ガーナチョコ塗装車）に掲げられるほか、中央区のギャラリーにも3月中展示された。

○

現在走行している市電車両のうち最古参は道内で昭和30年代前半に製造されたもので、50年もの間の風雪の中の営業運転に耐えてきた。改造・修繕・整備にも拘わらず、車体の老朽化が目立ち、交通局でも、今冬は、次世代の市電を担うともいえる高性能バッテリーを搭載し、架線のない区間でも走行できる新型ハイブリッド型路面電車「ハイ！トラム」と「スイモ」の試験運転が行われた。省エネ型の車両が今後の市電車両の中核となる日も遠くはないのであろう。

札幌の街には市電が似合う。市電と関わる人々、乗客の姿。また、沿線至るところに存在する撮影ポイントから四季折々にとらえられる。札幌の街と良くマッチする市電の姿を余暇に撮り続けてゆきたいと考えている。